

「こどもたちを笑顔にしたい」という思いがきっかけで、大学卒業後、小児、感染症病棟での臨床経験を経て、国際医療協力局で働く看護師

あまの
天野

ゆき
優希

国際医療協力局
人材開発部 研修課
看護師



★略 歴

- 2016年3月 福島県立医科大学看護学部卒業
- 2016年4月 国立国際医療研究センター病院小児科
- 2019年4月 国立国際医療研究センター病院GCU病棟
- 2021年1月 国立国際医療研究センター病院感染症病棟
- 2021年8月 国立国際医療研究センター病院小児科
- 2022年4月 国立国際医療研究センター国際医療協力局入局 人材開発部研修課

★現在の主な担当業務

- ・NCGMグローバルヘルスベーシックコース研修
- ・JICA課題別研修「UHC達成に向けた看護管理能力向上」
- ・看護職看護実務体験研修運営
- ・医療技術等国際展開推進事業
「ベトナムにおける医療安全推進のための院内組織体制強化事業」
- ・看護専門学校「国際看護学」非常勤講師
- ・LIMQSチーム／災害対策委員会

天野さんが、医療職・国際協力を目指したきっかけを教えてください。

私が医療職を目指そうと思ったのは、中学時代に見たユニセフや国境なき医師団のビデオを見たことがきっかけでした。ビデオの中には、自分と同じくらいの歳の子が登場しており、とてもやさしい姿、大きな瞳でじっと、こちら（視聴者）を見ていたのが衝撃的でした。「生命の重さや価値はみな平等であるにも関わらず、どうして住む国が違うだけでこんなにも格差があるのだろう」、、、そう感じたのを覚えています。そして、発展途上国に住む子どもたちを救いたい、世界中の子どもたちを笑顔にしたい、そう思い医療職を目指しました。

また、2011年に地元仙台で東日本大震災を経験しました。震災当時は、災害時における備えの知識や行動については全くの無知でした。震災を実際に経験し、その時に災害の知識があれば、もっと社会に貢献できることが出来たのではないかと思うようになりました。

後に未曾有の災害だったにも関わらず、一人でも多くの生命を救おうと駆けつけ、臨機応変に対応している医療チームの姿を見て、より一層、看護師になって多くの人を救いたいと思ったことも医療職を目指したきっかけです。



東日本大震災後の復興支援として発足した「TOMODACHIイニシアチブ」のリーダーシッププログラムでシアトルに行った時の写真。世界観が大きく変わりました。

国際医療協力局に入職する前はどのようなキャリアを積まれていたんですか。

私は学生時代から海外に興味がありました。また、看護師を志してはいましたが「何か看護以外の勉強もしてみたい」と思い、国際交流事業やスタディーツアー等自ら色々なプログラムに申し込み参加をしていました。

大学卒業後は国立国際医療研究センター病院に就職し、第一希望であった小児科で働いていました。主に乳児から高校生までの急性期、がん化学療法中の患者さんを見ていました。



大学のスタディーツアーでタイのコンケン大学へ。とても刺激を受けたツアーでした。



小児科臨床時代



同期と一緒に

その後GCU（新生児回復治療室）病棟に異動し、急性期を脱した新生児及び乳児のケアやご家族が安心して退院できるよう、育児手技の指導や生活環境を整えるサポートをさせていただいておりました。入社してからはずっと子どもに関わる病棟で勤務していたのですが、COVID-19拡大に伴い、当院は特定感染症指定医療機関としてCOVID-19を受け入れていたため、その対応強化として感染症病棟へ異動となりました。

ほとんど成人の患者様を看護したことが無かったため、初めて成人の看護実践を学びました。その後また小児科病棟に戻りましたが、COVID-19の影響で成人受け入れ病棟が減少したため、小児科病棟ではありますが新生児から高齢者までの看護実践を行っていました。時には大変なこともありましたが、どの病棟に異動しても、常に周りの方々に支えられて過ごすことが出来たと感じています。

国際医療協力局に入局したきっかけ、理由を教えてください。

私が当院への就職を決めたのは「国際医療協力局」があるからでした。

国際医療協力局を目指したいとは思いつつも、最初は看護の基礎について学ぶ必要があります。就職先を決める際、社会人1年目という何もかもが新しく忙しい状況下では、忙しさを理由に自分の思い描いていた夢も消えてしまうのではないかと考えたことがありました。しかし、NCGMグローバルヘルスベーシックコースや院内の研修等、新人からでも受けられる研修があることを知りました。看護師勤務が忙しくても、国際保健を身近に触れることが出来るのであれば夢を追い続けることが出来るのではないかと、そう思い当院への就職決めました。その後は国際看護や国際医療協力局の実務体験研修を経て、異動のお話をいただきました。異動のお話をいただいた時は、もっと経験を積んでからの方が良いのではないかと迷いましたが、この機会を手放してはいけないと思い異動することにしました。

入局してからは、低中所得国の保健人材や、グローバルヘルスに興味のある日本人を対象とした研修事業などに携わっております。研修事業に携わる事で、受講者のニーズに合わせた研修を行うにはどうすれば良いか、どのような研修をデザイン出来れば受講者の満足度の向上や行動変容に繋がるか、について考えるようになりました。また、研修当日までの綿密な打ち合わせ等、準備の大切さを感じています。

また、常に質問を持ち、自分の意見を相手に分かりやすく伝えることの大切さ、を日々痛感しています。国際医療協力局にいと、ものごとの変化や革新は良い質問から生まれるように感じます。それはどの場においても、とても価値のあるものだと思います。そのような視点を忘れずに仕事に取り組んでいきたいと思っています。



ベトナムのホアビン省総合病院での研修
(NCGMグローバルヘルスフィールド
トレーニング)

——— 今後はどのような展望、夢をお持ちですか。

現在は日々新しいことの連続で、吸収するのに精一杯ですが、「誰一人取り残されない社会づくり」に貢献出来ればと思っています。

また、今まで小児分野に長く携わってきましたが、自分自身の領域だけでなく色々な領域にチャレンジすることも大切だと思っています。公衆衛生や熱帯医学分野にも興味を持ち始めたため、大学院進学等も検討していきたいと思っています。



WCCフォーラムに参加した時の写真

——— 最後に、これから国際医療協力の世界を目指そうとしている人にメッセージをお願いします。

私は国際医療協力局に入局してまだ日が浅いですが、昔から思い続けてきた「世界中の子どもたちを笑顔にしたい」という思いは今も変わりません。

自分の思いを持ち続けつつ、周りに発信していくことが大切だと思います。国際医療協力局にたどり着くまでに色々な経験をさせていただきましたが、すべての経験がいまの道に繋がっていると感じています。いま自分が担っている仕事を丁寧に取り組み、自分自身の引き出しを増やしてください。国際医療協力というフィールドで一緒に働ける日を楽しみにしております。



——— ありがとうございました。